
バイオリン弾きのピエロ

青岬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオリン弾きのピエロ

【コード】

N0414I

【作者名】

青岬

【あらすじ】

猛獣使いの少女が、ピエロにバイオリンの演奏を頼む。

彼は一番の人気者だった。

一輪車で綱渡り、つてのは朝飯前。

長刀でジャグリング。

直径二メートルもあるピンク色の太玉で玉乗り。

いきなり体が爆発したと思ったら、次の瞬間には観客席で仁王立ちしてる。

あ、ちなみに最後のが彼の十八番。

彼はサーカスのピエロだった。

今日の公演はとつくに終わった。

暗い舞台裏の中で、彼は檻の中に手を伸ばして、虎の顎を優しく撫でていた。

彼にかかれば、虎だって可愛い盛りの子猫だ。

ごろごろと喉を鳴らして身を委ねている。

猛獣使いの私も、少し面喰らう。

悔しい。

「ねえ。」

声をかけると、彼はゆっくりこちらを向いた。

「ああ、おつかれさま。」

右目には涙、左目には星。

黄色い服にオレンジ色の水玉模様。

彼は公演が終わってもピエロのままだった。

「お互いにね。」

クククと笑う声がした。

でも仮面だけを見せられている私には、彼が本当に笑っているかどうかなんて分からない。

「ねえ。バイオリン、弾いてよ。」

彼がバイオリンを持っていると知ったのは、バイオリンを弾けると知ったのは、そう最近ではない。

私が今より頭一つぶん背が低かった頃、眠れずにテントの中を歩き回っていたら、音が耳に届いて。

楽しそうで悲しそうで寂しそうで怒ってそうで、ああまるで歌っているみたいだなあって思った。

そして深紅のカーテンを開けたら、このピエロがいて。

目を開けて、演奏者を見た。

なんてミスマッチな光景。

下品な原色だらけの派手な色と、上品な深い茶色。

透明感のある音。

そして無機質な音。

狭い空間に、空しく響いた。

舞台側に移動しても、きつとこの音は聞き取れる。

私は、実はちょっと踊り子に憧れている。

踊るんなら、彼に曲を演奏してもらいたい。

お願いしたら、どんな顔をするだろう。

驚くのか。

眉間に皺を寄せるのか。

いや、彼はピエロだから。
きつと、笑ってこの頼みをきいてくれるのだろう。

胸糞悪い。

音が止まった。

ここで終わり？

今日は随分と早い。

演奏の終わりは、彼の気分次第。

ここで唯一感情を出してくれる。

終わってしまったら、いくら頼んでも二度とバイオリンを肩に置いてくれない。

逆にもういいと言っても、無視するように、というか無視なのだろうけど、絶対に音を途切れさせない。

天邪鬼？

それとも満足するまで弾きたいだけで、私がいようとしまいと関係の無いこと？

「おやすみ。明日も頑張ろう。」

ああ、きつと最後の言葉は社交辞令。

「ピエロ。」

私は彼の名を呼んだ。

名前は知っているのだけれど、もしかしたら偽名かもしれない。こっちのほうか確か。

「何だい？」

バイオリンをゆっくりとケースにしまいながら、彼は答える。

私はわざわざ呼んだくせに、次の言葉を紡ぐのを躊躇った。

ピエロがこちらに頭を動かす。
私と彼は、しばらく向かい合った。

言葉はもうこないと思ったのだろう。

少しして彼は後ろへ足を向けた。

私を置いて、闇の中に消えていこうとする。

「ピエロ！」

再び彼を呼んだ。

彼は立ち止まって、こちらを振り向く。

迷惑なことをしているのは、重々理解している。

口角を上げながら、言った。

「誰かに見せる顔が見つからなかったら、探しに行けばいいのよ。」
彼は動かない。

ああ、きつと愚かな女、と思われているんだろう。

まあ、それでもいい。

「おやすみ。」

彼は、また足を進める。

こつん、こつんという足音がどんどん遠ざかっていく。

そして、彼は完全に闇の中へ消えた。

私は、堪えきれず、大声で笑った。
少しだけ泣いた。

(後書き)

近づきたいけど、近づけない。

分厚い壁があるから。

それだけでも十分悲しいのに、その壁を作っているのが、相手と自分自身だったら。

そんなに笑えて、そんなに悲しいことはちょっとない。

そう思っただけのお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414i/>

バイオリン弾きのピエロ

2010年10月17日05時05分発行